

10章 子ども学力向上プロジェクト（備品 300）

全国を歩き、学力が向上している学校は、同じ特徴がある。①普段の授業が子ども主体的 ②学力向上策が子ども主体のスタンダード授業と連動している。多忙感に追われている教師は、全国学テ、県版学テ等に向かえない。間もなく4月の本番を迎える。教師ではなく、子どもが組織立てを行っているから学力が向上している。

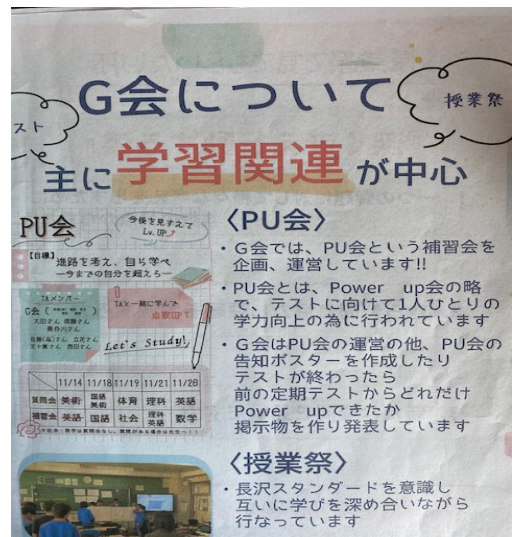
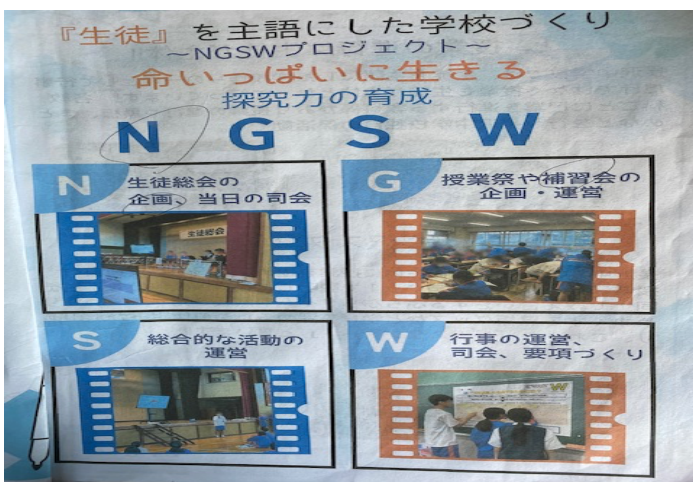
1 これまでの学力向上策の課題

①教師中心の学力向上策である ②時期が来るから対策をするという組織風土 ③名人芸のような教師が該当学年を担えば、学力が向上するという誤った考え ④全国学テや県版学テは、日時は決まっているが日々の生徒指導やカリキュラムに追われゆとりがない ⑤学力向上対策より生徒指導が重要というじゅうらいの学校風土。

2 子どもが担う学力向上対策

学校は、「子どもたち同士で分からないことを聞き合う場」である。授業もそれと連動し、「子どもが創る授業」である。教師から一方的に話をする授業であってはならない。学力向上対策も同じで、教師だけでなく、子どもたちが協働で行うという仕組みが必要だ。日々の授業だけでは学力は身に付かない。「子ども学力向上アップ委員会」といった内容のような組織を学校に置くとよい。私たちが子どもの頃、仲間で「勉強会」をしたような組織を校内全体で組織化を図ると。N中学校の実践が参考になる。

3 子どもカリキュラム・マネジメントと補習会



「生徒」が教師と同じようなマネジメント（運営組織）を行っている。Nチームは、生徒会。Gチームは、授業研究会や補習会の企画・運営。Sチームは、総合的な活動。Wチームは、行事の企画・司会・要綱作成。学校は教師だけで運営するのではなく、子ども達が運営してこそ、学校力・学力が向上するのは確かだ。これまでの学校長だけが作成するランドデザインや、教務を中心に作成するカリキュラム・マネジメントも一考したい。

特徴的なことは、学力のパワーアップを子ども達自身で行っていることだ。前の結果と比較してどれだけパワーアップをしたかを掲示物やプリントを作成している。

4 教科リーダーを中心とする学力向上部会

教科リーダーは単なる一教科の司会・進行をするだけではない。各教科の教科係・班長・教科リーダーの3者で構成している。教科リーダーが教科係に呼びかけ授業研究会を行い、学習スタンダードの作成も行っている。右記の写真は、生徒が研究会に参加した教師に向説明をしている場面だ。生徒は「教育用語」を使わない。教師の説明より分かりやすい。-45-

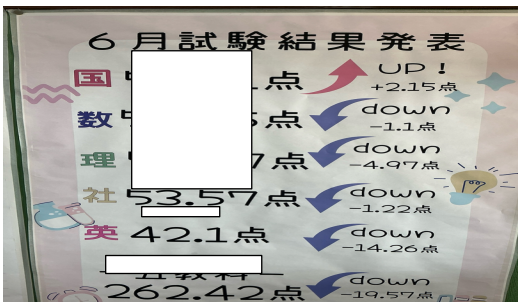


5 G会（生徒の学力向上対策チーム）の具体的な動き（長沢中）

(1) 補習会の企画・や反省会 テーマ「平均点を上げよう」



(2) テストの結果（掲示板に結果を貼り出す見える化）と授業評価会



(3) パワーアップ会の掲示物

PU会 みんなでレベルUP!!

目標 今の自分よりもLevel UP!

去年の自分を超えろ!!

TAも一緒に Let's study!

TAメンバー
G会 (高橋(聖)、船野(実)、大田(真)、須藤(聖)、長谷川(聖))
G会 (大田(真)、須藤(聖)、長谷川(聖)、立花(聖)、西田(聖)、佐藤(聖))

	6/2	6/3	6/4	6/5	6/6	6/10	6/11
質問会	数学		体育	数学	理科	国語	英語
補習	理科	体育(昼)		英語	社会	国語	数学

※社会は質問会なし。質問がある場合は栄俊先生へ!!
※6/3と6/4は部活などの関係でなしそれぞれなしがある

PU会 今後を見すえてLv. UP↑

【目標】 進路を考え、自ら学べー今までの自分を超えろー

TAと一緒に学んで点数UP!

TAメンバー
G会 (高橋(聖)、船野(実)、大田(真)、須藤(聖)、長谷川(聖))
G会 (大田(真)、須藤(聖)、長谷川(聖)、立花(聖)、西田(聖)、佐藤(聖))

	11/14	11/18	11/19	11/21	11/26
質問会	美術	国語	体育	理科	英語
補習会	英語	国語	社会	理科	英語

※社会・数学は質問会なし。質問がある場合は先生へ!!

(4) 補習会と来校者に授業の感想を聞く



6 子ども学力向上小学校プロジェクト（学習のわざ委員会の設置・備品 28）

学校には、6 学年という子どもの財産がある。まずは、異学年で学び合えば、先行して学んだ子どもたちが下学年に「教え」「教えられ」という関係が生まれる。そのための組織をつくることが重要である。

(1) 異学年交流授業（小学校）

教師が存在することは、常に子どもたちは「教えられる」関係であった。それを「子どもたち同士」が協働的に異学年で学ぶことが考えられる。複式学級では当然のことだが、隣接する学年と常に学んでいる。そこには異学年の様子がよく分かり、子どもたち同士で学んだりしている。分からないことを聞き合う自然な姿がある。

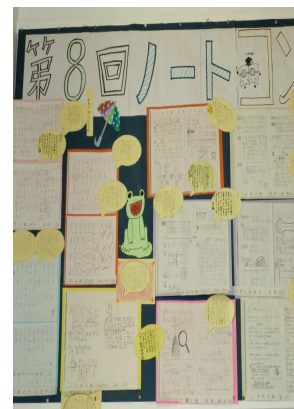
東京の学校では、異学年交流授業のカリキュラムを再編成して全校体制で行ってきた。学級力や学校力が向上した事を経験してきた。それが学力向上につながったのは確かだ。

(2) 「学習のわざ委員会」の新設

委員会活動は、子どもの主体性・自治能力・問題解決力を育てるためにある。これまでその活動に「学習活動」へ直接影響するような委員会がなかった。授業は教師が行うという強い考え方があったからだ。そこで元勤務校は、子供自身が学びを創ると考え、「学習のわざ委員会」を設置した。ノートコンテストの推進、「授業進行係り」の設置、学習言語わざの状況調査等を主な活動とした。教師が校内研修で行ってきたような内容を子どもたちの「学習のわざ委員会」が担った。そこに学力向上プロジェクトも導入した。

①ノートコンクール及びノート大賞

ノートコンクールは、子供にノートの取り方や学び方のモデルを示し、ノート作りの意欲を高めるために行った。そのノートコンクールは、担任と学習のわざ委員会が担った。組の代表児童を選出し、委員会活動で選考する仕組みだ。ノート大賞は、「授業ノート」「家庭学習自学ノート」の2部門とした。期間を設け、自推で応募する形式をとった。「授業ノート」の評価基準を、「ノート一冊そのものがノートコンクールの評価規準に準じて作成されている」とした。ノートコンクールの運営を子どもが担うことによりノートの内容が良いものとなった。



(3) 学習リーダー

学習指導要領総則にも「指導にあったては、自主的・自発的な学習が促されるように工夫すること」とある。授業力とは、案外、教師より子どもが身に付ける力ではないだろうか。その方策として、高知県を始め全国の学校に「授業進行係り」の導入を勧めてきた。子どもが主体的・協働的に仲間と学ぶための方法となるからだ。これまでの「教科係り」は、担当の教師から持ち物や宿題等を聞き、教室でそのことを伝える役割しかなかった。そこで学習のわざ委員会の事業として、これまでの「教科係り」を「授業進行係り」として各学級に位置付けた。教師の独壇場の授業を止める一つの方策としても導入したかった。

最初は、「授業進行係り」に多くは望まなかった。だが、子どもは、「授業進行係り」に慣れるにしたがい、自分たちで授業運営を一層行いたいという思いが強くなってきた。そこで、「授業進行係り」に多くの授業運営を任せるようにした。

(4) 学力向上パワーアップ作戦

「学習のわざ委員会」は、4 年生以上で編成したが、実際は下学年も委員会に参加した。その委員会が担当した内容である。

①〇〇ドリルを使って、全学年で学ぶ。

②授業集会を開催（全学年で授業を観る）した折に、「勉強会（学力アップ）」を開催とその内容を通知。

③卒業生が夏季休業中に、〇付け係りとして参加。解答が出ない子への対応をしてくれる。

④全国学調対策は、1月からスタートし、主に6年生が5年生に「解答方法」を伝授する。4月末までに週一回実施をした。*教師の校務分掌も1月からスタートとしていた。

⑤全国学調実施後は、新6年の「学習のわざ委員会」が全校に「平均点を上げよう」の結果報告をした。

一過性の基礎基本向上の学力対策から子どもが補習プリントの作成、聞き合い会等の開催が「当たり前」と思う。